

低かった。(3)血清セクレチンは潰瘍の部位、ステージ別に有意差はなかった。(4)血清モチリンは胃角部、幽門部、胃体部の順に高かった。ステージ別には有意差はなかった。(5)血清モチリンの試験食摂取後の反応率は幽門部潰瘍で高く、また治癒期で高かった。

まとめ: 胃潰瘍における GSG による胃排出時間と消化管ホルモンは潰瘍の部位・ステージで異なった値を示した。胃排出の遅い胃体部潰瘍や活動期の潰瘍では血清ガストリン値が高く、モチリン反応率は低い。また、胃排出の速い幽門部潰瘍や治癒期の潰瘍では逆の結果が得られた。すなわち、胃潰瘍において、胃排出とこれらの消化管ホルモンの関連性が示唆された。

32. ^{99m}Tc -PMT の集積した原発性肝癌の1手術症例

浜田 俊彦 橋本 勇 坂本 武茂
込山 豊蔵 吉野 朗 (兵庫成人病セ・放)
金丸 太一 多淵 芳樹 斎藤 洋一
(神戸大・一外)

症例は50歳男性、肝機能障害を主訴とし精査のため来院した。15年来肝機能障害を有しており、59年3月 α -FP 値の軽度上昇を近医にて指摘されていた。9月に同値 860 ng/ml となり、10月15日当院初診。父に肝硬変があった。アルコール歴としてウイスキー 100 cc/日を30年間続けていた。自覚症状なく、触診にて肝を1横指触れた。血液検査; WBC 4,700, RBC 422×10^4 , Platelet 14.9×10^4 , GOT 71, GPT 84, T. P. 7.5 g/dl, T. Bil 0.6 mg/dl, HBs Ag (-), HBs Ab (-), α -FP 1,490 ng/ml. これより原発性肝癌が疑われた。即日、超音波を施行し、左葉外側区 S2 領域に 1.6×1.3 cm の SOL を認めた。halo を有し、内部 echo のやや高い腫瘍であった。CT も行ったが tumor を指摘できなかった。次に ^{99m}Tc -PMT による肝胆道シンチを行い、静注後60分の像より S2 領域の hot spot を認め、180分の像では高い集積を呈し、300分後ではやや集積は減じている。胆道系への排泄は全般に良好であった。以上より S2 の原発性肝癌と診断した。手術可能と考えられたが、血管造影でも S2 に限局した腫瘍濃染像を認めた。手術は12月5日に施行され、外側区域切除の結果、S2 にとどまる $2.5 \times 2 \times 1.5$ cm の、被膜を有する腫瘍であった。門脈、静脈、胆管への侵襲はみられなかった。肝硬変は軽度であった。病理所見にて Edmondson II 型, trabecular type で、

胞体内に胆汁色素がみられた。

^{99m}Tc -PMT によって腫瘍の存在診断と質的診断が可能であった小肝癌(受診時)の1手術症例を経験し、本法の有用法を認めたので報告した。

33. 肝細胞癌の診断における ^{99m}Tc -PMT イメージングの意義

長谷川義尚 野口 敦司 橋詰 輝己
井深啓次郎 中野 俊一 (大阪成人病セ・RI)

肝細胞癌の診断における ^{99m}Tc -PMT 後期イメージングの意義を明らかにする目的で、手術あるいは剖検により診断された肝細胞癌32例について、 ^{99m}Tc -PMT 後期および ^{67}Ga イメージングの比較を行うとともに、腫瘍によるこれらの放射性薬剤の取り込みに影響を及ぼす要因について検討した。肝細胞癌の32例のうち、 ^{99m}Tc -PMT の強い取り込みを認めた陽性例は14例、これに対して ^{67}Ga シンチの陽性例15例で、略々同様の頻度で腫瘍が陽性に描出された。放射性薬剤の腫瘍による取り込みの有無については、両者の薬剤の間に相関を認めなかった。 ^{67}Ga イメージングにおいては大きな腫瘍では陽性例が多く、小さな腫瘍では陽性例が少なく、 ^{67}Ga の取り込みと腫瘍径の間には相関がみられた。これに対して、 ^{99m}Tc -PMT の取り込みと腫瘍径の間には明らかな相関を認めなかった。次に、両者のイメージ所見を腫瘍細胞の核の大きさおよび過染色性と比較すると、これらの細胞学的所見において分化の程度が良好と考えられる腫瘍では ^{99m}Tc -PMT 陽性例が多く、 ^{67}Ga 陽性例が少なかった。これに対して分化の程度が上記のものよりやや低いと考えられる腫瘍では、その逆の傾向がみられ、 ^{99m}Tc -PMT 陽性の腫瘍と ^{67}Ga 陽性のそれは分化の程度において若干異なった群に属する可能性が示唆された。